

って、その基本である食糧の生産を軸にしなければいけないはず。そして食糧がより多量で、よりよいものであるためにはどのような条件が必要なのかという系統性で教材が編成されなければなりません。またその内容が子どもの発達段階と学習の順次性・転移性に規定されるのは当然のことです。この点、新指導要領は「裁量の中を抜け、普通栽培でもよい」などと云うことになるようです。しかし問題は「普通栽培でもよい」という発想です。現在どれ程の生徒が普通栽培をどの程度経験しているのでしょうか。一般に思われている程豊かなものではありません。まずは普通栽培こそ教材化しなければならないと思います。この基礎があってはじめて作物に対する物理的・化学的处理が扱われることになるわけです。

私は今年、大豆を育てています。これは日本人の食糧のひとつとして大切な作物である

こと、荒地でも容易に育つことなどいろいろありますが、最終目標は収穫して食べること、どのくらいもうかるのか計算してみることなどです。また収穫した大豆を使って男女共学の食物学習に発展させる可能性を含んでいると思います。

近年全国教研の技術・職業分科会のみならず地域教育・障害児教育分科会などでも栽培を通して様々な成果と教訓をあげている実践報告が目立って増えています。

技教研全国大会での栽培分科会は独立して今年で2年目ですが、昨年はいろいろな視点から議論となりとても有意義でした。人間の生産労働の根源にかかわり、自然法則性、社会性・集団性など、ひとつの実践も実に多くの内容をもっています。野菜でも、果物、草花でも、とにかく播いて育てた経験をもちよって、我々の側の栽培・農業教育を確立させましょう。(文責・直江貞夫)

問題別分科会 F

地域の技術史

書物に記述された一般的な技術史、外国の技術史を学ぶことはもちろん大切だが、それに終始するのではなく、自分たちが生活している地域の技術史を掘りおこすことを通して、できれば具体的な事物にふれながら、技術史を生き生きとしたものとして研究し学習しよう。そのような(教師の)学習は、近年、技術教育や社会科教育の実践家のあいだで注目されている「技術史学習」を生き生きとした内容豊かなものとするみちでもあろう。これが当分科会設定の趣旨である。当分科会は74年の第7回大会(伊豆)以来常設され、今年で4年目を迎える。

昨年の分科会では、青木不二夫氏の「上総掘り」と亀田光三氏の「重力原動機について」という二つの事例研究と、加藤幸宏氏の授業実践「猿が人間になるについての労働の役割

と東正彦氏の「生徒の水車調査記録」という実践を中心に活発な討論が行なわれた。今年に入って、各地に散在し消滅の危機にさらされている産業上の遺物を調査研究し、できれば保存しようということを趣旨とした日本産業考古学会も発足した。もちろん技教研とは別組織だが、このような、いわば「地域の技術史」学会ともいべき組織が発足したことは注目されてよいであろう。技教研としても、これらの動きをふまえて、初めて『会報』1110号(77年4月号)で「地域の技術史と技術史学習」という特集を組んだので参照して欲しい。

今年も、地域の技術史の掘りおこしの事例研究と授業実践を討議の柱としたい。そして、事例に即して、技術史を学び学ばせることの意義について話し合いをふかめたいと思う。

なお、地域の技術史を学習するという場合、近年ようやく地方自治体行政のなかで重視されるようになってきたように見える博物館の

役割についても考えてみたい。

(文責・佐々木享)

問題別分科会 G

条件整備・安全・公害

昨年までの「公害と安全教育」および「条件整備」両分科会を併合して、年次大会では、「公害・安全・条件整備」分科会としました。この三者を技術教育を推進するうえで直接的に結びつかせること自体に問題はあるのですが、例年の参加者が特に「公害と安全教育」分科会に異常に少ないという現状もあってこうなったことをご理解頂きたいと思います。

まず「公害と安全」領域では、現代の社会のなかに多発している諸公害をつくらぬ方向での教育の現場に於けるその対処のしかたについて「公害テキスト」を自作され、高校の授業にとり入れ、永年労働災害の実態をも研究されている荒川さん(東京)、技術科の原動機の授業で公害ととりくんで居られる及川さん(岩手)らから問題を提起して頂くと思っています。

また「安全教育」については、技教研では原・佐々木両先生が古くからこの問題の重要

性を喚起して居ますので、最近の動向についてご報告頂きます。

「条件整備」については、会報107号がこれの特集し、そのなかに昨夏大会の総括が行なわれています。小学校・中学校については教室数の不足・設備等の物的条件・授業時数・担当教師の不足等の人的条件の両側面を分析しながら研究を深めたいと思います。高校に於ても同じように産振設備の設備状況のアンバランス、全日制・定時制かけもちの実習担当という物的・人的条件の検討すべき余地を充分に残しています。

何といっても施設・設備を中心にした条件整備は、子ども青年の学力を正しく伸ばすという方向、いいかえれば自主編成運動に大きななかかわりを持ってののです。できれば昨夏大会の課題である「白書」をつくって参加し討議を深めましょう。

(文責・河野義顕)

問題別分科会 H

授業の方法(1)——自然科学と技術教育——

今年の大会から、「授業の方法」の分科会が二つに分割された。一つの分科会に参加する人数が余りに多くならないため、と討議の焦点を絞り、より密度の高い討論をしたいためである。

近年、技術教育関係者の間に「技術論」の関心が高まり、労働手段体系説が定着してきている。そこでは「技術は科学の応用である」といった俗説は払拭されたといってよい。だが、そのことは決して技術教育における自然

科学的知見のための重要性を否定するものではない。子どもたちに与えるべき技術教育・理科教育の役割と内容、両者の関連については十分な検討を必要とする。理科教育における現行学習指導要領による異常ともいえる

「探究学習」の強調は、現実の“物”から離れた操作主義に陥り、理科ぎらいの子どもを生みだしている。

技術教育においては、電気や機械など、一定の自然科学の知見を前提にしなければ成果